

第2回フィロソフィア「魂の不死について——宗教と哲学と科学——」

2005-04-29

小林正弥

■第1部「宗教と哲学と科学——3つの「真理」の連合——」

1 序——三つの真理

(1) 署名の間

第1回 ラファエロ

アテネの学堂

哲学的真理

聖体の論議

宗教的真理

パルナッソス

美

対神徳と枢要徳・法律

善

3つの真理 これらを総合的に考えるのが当初の「愛智の学」(広義)

この中で、固有の哲学(狭義)が存在(第2・3部参照)

(2) 古典時代からの洞察

古典から今日へ、並行性の存在

古典時代の「科学」(自然学)による宗教の動揺と哲学

—魂(=思惟)の哲学と、それによる宗教との架橋

近代科学による中世的宗教の動揺と哲学

→デカルト→思惟哲学と、それによる宗教との架橋

→哲学と宗教との相補的「総合」=連合

——総合的愛智学=「哲学=宗教=科学」への「無知の智」

2 宗教と哲学——超「宗教—哲学」への新対理的な「動的総合」

(1) 相違点

宗教 教祖や預言者などへの啓示や悟りに依拠

実際には全てが相対的で限界を持つ。

→絶対的真理と思ひ込むことによる弊害。

理性と両立せず抑圧する危険。

時代が経つと、古くなって限界が露呈

例:宗教戦争・自由な学問の抑圧・原理主義。

哲学 理性的、しかし人間の思考に基づくのでそもそも有限(「人間並みの知恵」弁明)、

また自由なので臆説や真理に決定的に反する議論に陥る危険。

例:反—真理、反—美德

ソフィスト、無神論、ポスト・モダン

→宗教と哲学の新対理的「総合」の必要性

(2) 超「宗教—哲学」へ

哲学 宗教性を前提とした上で、自由な思想的展開——哲学の役割。可謬なものとして

提示。学問的検討や協力によって、全体として発展させる。——宗教的哲学

宗教 これを許容して、自由や理性と両立させると共に、時代に合わせて解釈学的展

開を行う。——哲学的宗教

——先例:トマスの総合、ネオ・プラトン主義

→従来の宗教や哲学の限界を超えた超「宗教—哲学」

これによって、双方の限界や弱点を補う

哲学には宗教性を、宗教には哲学性を

——「超宗教—超哲学」=超「宗教—哲学」

ただし、双方は固有のアートを持つから、安易に同一化はせずに、緊張関係を持続する。

### (3) 新対理的「総合」= 対理的連合

→例えば、哲学は、宗教へのアドバイスをを行う。

・誤った宗教への論理的批判 プラトン以来。悪性カルト宗教批判。

- ・ 民族宗教の特殊主義的限界を指摘して、地球域的な発展を提案

——例：日本神道から地球神道・宇宙神道へ

- ・ 尊敬すべき諸宗教(文明を形成した宗教=文明宗教)の間における、共通性を指摘して哲学的に正当化

→諸宗教に共通に存在する真理を「重なり合った合意」として地球的に定礎することが理想的

= 地球的普遍宗教 = (地球的) 公共的霊性

= 万人共有の学智へ

## 3 科学と哲学——二元論的科学とその接合

### (1) 「近代的世界観=原子論的・機械論的世界観」の限界

いわゆる「デカルトーニュートン」的世界観

注意：「いわゆる」

### (2) 文理の認識ギャップ

自然科学・実証科学の一元論(自然主義、原子主義)

→唯物論、ポスト・モダン派など

→一元論批判の必要性

- ・ 近代的・原子論的世界観は自然科学における 20 世紀の革命(相対論・量子論)により覆されたが、その認識が文系には薄い。

——科学哲学(自然科学の哲学)の必要性

### (3) 二元論的「科学」

社会科学の哲学——解釈学などの精神科学(人間科学)

解釈学 ヴェーバー、デールタイ、ガダマー

構造主義 レヴィ=ストロース 深層科学へ

——現段階における二元論

自然科学／精神科学(人間科学)

表層科学／深層科学

超個心理学者ケン・ウィルバーの「宗教と科学との統合」

「個的／集合的、内面／外面」という4象限 広義の科学

——特に「深層科学」(deep science) 文献3(231頁)、4

### (4) 今日における哲学的「無知の智」

「統一科学」を形成しようとする夢=究極の理想としてのオメガ点

= 全智ないし神智

——しかし、人智においては、大統一理論等々やニュー・エイジ的企図(霊的科学)は少なくとも現時点では未成立

総合科学 自然科学と社会科学の統一性=統一科学

### (5) 接近

根拠 量子力学における観測問題=主客相関

＝社会科学への接近

cf.物理学／生物学 ホロン、自己組織性

→自然科学に依拠するのではなく、生命科学・人間科学・社会科学の洞察を組み入れる必要性。

#### 4 多次元的思想哲学

##### (1) 思想哲学の再生

→「思想の世界＝魂の世界」についての哲学

ソクラテスの伝統——生き方、美德、魂

プラトンの展開——实在理念、理念数

→社会科学からの統一理論 实在理念空間の記述

(ポパーの3世界論→稲垣久和:4世界論)

##### ★ 記述方式の発見(89 1/7)

プラトン『国家』(小文字の正義を大文字の正義によって探究)に示唆されて、歴史的世界の数学的記述方式の「発見」

多次元空間(思想空間＋現象空間＝7次元空間)

思想空間(精神空間) 水平・垂直・超越

——(政治)思想史における普遍的深層精神

＝「我思う、故に我有り」(デカルト)＝「思想存在(思想する実体)としての私自身が存在する」という直観(直智)

→「思想する我」の思想自体を定位させる座標軸は単に唯名論手段ではなく、实在空間＝实在理念空間という直観

——思想物理学・思想科学

(デカルト→新思想哲学 デカルト空間→4次元時空間＋思想空間)

→公理系の構成へ。

「人間の本質＝思想体(＝魂)」という仮定からの演繹的説明

(⇔原子論的仮定を置く公共選択理論)

傍証:心身問題、超個心理学、超心理学、文明論(マクロからの論証)など。

→「思想科学」が成立すれば、総合「科学＝愛智学」への展望＝超「科学＝哲学」

しかし現時点では「無知の智」の自覚が必要

##### (2)『パイドン』を参考にした思想哲学の再定式化

①自然科学との関係 思想する魂(思想体)の哲学＝思想哲学

②論証法

主たる論証 「公理＝哲学的信仰」→仮設演繹法

傍証 超心理学、超個心理学、臨死体験研究など

③魂の定義

魂の定義 生死を超えて自己同一(アイデンティティ)を保つ思想する力を持つ存在＝思想体

→正思想義認論＝高思想進化論(参考:学問改革論)

「思想、すなわち自己(の本質)」

④哲学の真義

哲学＝思想体としての純粋な思想を希求するが故に、魂の肉体からの解放たる死の練習

cf. 心身論との関係

⑤哲学と宗教(神話)

臨死体験・輪廻転生——傍証。

5 宗教と哲学と科学との新対理的「動的総合」

(1) 2元論の統合による「霊的人文社会科学」と「霊的科学(spiritual science)」

古典と近代

——ギリシャとローマ

——ルネッサンスと宗教改革 霊的人文主義+学問(学芸)改革

東洋と西洋

宗教と哲学

社会科学と自然科学

→霊的人文社会科学

これに対して、さらにその先には霊的科学(自然人文社会科学)の展望、しかし現時点では「無知の智」

(1) 新対理的な3真理連合

広義の「愛智学」における新対理的「動的総合」

=「宗教—哲学—科学」連合=3真理連合

哲学的(科学的)宗教—宗教的(科学的)哲学—哲学的(宗教的)科学

この三つは相補的に連合しうる。しかし、同一にはなりえず、緊張の持続する連携として、  
新対理的な動的「総合」

- ・ 宗教と哲学(前述)
- ・ 科学と哲学 思惟科学の提起
- ・ 宗教と科学 宗教的科学=統一理論(霊的統一科学)への「無知の智」

6 新しい霊的な「無知の智」の原理——新時代の智的謙遜

●3つの傲慢

科学者の傲慢 「実証主義的」無神論→哲学・宗教的洞察への敬意の必要性

哲学者の傲慢 真理を否定するポスト・モダン派、宗教性や直観を否定する理性中心主義→科学的・宗教的洞察への敬意の必要性

宗教者の傲慢 霊的直観への自信—科学・哲学の軽視となると、  
教祖はともかくその後継者や信者になると硬直的。  
最悪の形態: 悪性カルト宗教(閉鎖的・抑圧的)

⇔「学知」は知を学問的に展開したもの。学知は無限の進展。終わりはない。→哲学的・科学的洞察への敬意の必要性

→3「無知の智」による新時代の智的謙遜=知的・宗教的謙遜

(2) 3つの「無知の智」

①科学的「無知の智」

近代的・機械論的科学的限界の認識=科学革命

他方、統一科学への無知

→思惟哲学=理念哲学へ

ソクラテス→プラトン

②哲学的「無知の智」

現代のソフィスト批判 唯物論、ポスト・モダンなどは原理的に論証不能→論証不能と知

っているだけ賢い＝無知の智

③宗教的「無知の智」

靈的直観の「智」→多層的「無知の智」

最高の宗教＝最高の智＝全智＝神智(定義)

これに対して、最高の哲学＝最高の「無知の智」の自覚を可能にする。

——「無知の智」の多次元化・多層化

ソクラテス以来の通常の「無知の知」＝現象界以上についての「無知の知」

→多次元世界を認識していても、さらにその上の全体像を知らないという点についての「無知の智」に発展させる

——ソクラテス的「無知の知」とプラトンのイデア論との統合  
(『弁明』と『パイドン』との統合)

---

参考: 学問改革

ルター 宗教改革

1. 万人司祭主義、2. 信仰義認論、3. 聖書中心主義  
キリスト者の自由

1. 哲学万人主義・万人哲人主義

2. 正思惟義認論→高思惟進化論

思惟、すなわち自己

3. 現代的「無知の知」→靈的「無知の知」へと発展

形而上学中心主義 存在生成論

愛知者の自由

参考文献:

1. A. E. マクダグラス『科学と宗教』(教文館)

2. F. M. コーンフォード『宗教から科学へ——ヨーロッパ的思惟の起源の研究』(東海大学出版会)

3. ケン・ウィルバー『科学と宗教の統合』(春秋社)

4. 拙論「新構造主義的政治理論——ルソー的論理の再生(2)——」『千葉大学法学論集』第11巻第3号、1996年12月

■第2部・第3部

●1. ギリシャにおける宗教・科学・哲学

philosophia 広義 教養・知的探究一般 前7-6世紀の知的態度に対応  
イオニアの自然学

狭義 哲学

前5-4世紀

ソクラテスープラトン

「智恵の愛好＝人間並みの知恵」

ギリシャ宗教

初期自然学

自然学者 ミレトス派 タレス 万物の元のもの 水  
アナクシマンドロス 無限なもの  
熱い／冷たい 相反

アナクシメネス                      空気  
濃厚化／希薄化

世界を一として把握  
解釈①「万物は一」という万物一如の「自然」体験  
自然神学・自然神秘主義・汎神論・汎靈魂論  
②「多から一へ」 一なる自然本性

ピタゴラス派    南イタリア    前6世紀  
魂を浄化する宗教集団、数学・天文学・音楽論  
秘密結社 政治集団  
学問研究→魂を身体の束縛から解放  
「万物は数から成る」無限なるもの→限りにより限定  
相反の表、三角数・正方数・長方数・テトラテュス  
調和論、対地星、天球のハルモニア

ヘラクレイトス    前6－5世紀  
ロゴス(言葉、理法)、反対(相反)の一致  
「戦いが万物の父」  
cf. 万物流転説            ?

パルメニデス    エレア    前5世紀前半  
西方イオニア  
信の道    ある    ロゴス    不生、不滅、全一性、不動  
確かめ得ぬ道    感覚    あることはない

パルメニデス以後  
多元論者    エンペドクレス    4つの根    火・空気・水・土  
結合／分離    愛／憎悪  
アナクサゴラス    万物の種    理性(ヌース)  
デモクラトス    原子論    空虚

エレア派    エレアのゼノン

ソフィスト  
プロタゴラス、ゴルギアス

宗教→  
①科学の分化    イオニアの自然学→多元論→原子論  
②人間中心主義、主観主義    ソフィスト  
③宗教的科学—哲学            ピタゴラス  
④形而上学的哲学              パルメニデス  
  
①+②    宗教から科学へ    (参考文献1)  
⇔狭義の哲学    ソクラテス—プラトン

● 『パイドン』

1. 自然学との関係

アナクサマンドロスなどへの失望→人間の生の問題へ  
魂の発見・探究

2. 証明法  
仮設演繹法(ヒュポテシス)  
イデア論をロゴスとして前提→イデア論からの魂の不死の論証
3. 魂 自己同一を保つ思惟する力としての靈魂
4. 哲学 純粋な思惟そのものによる探究＝魂により見る  
＝魂の肉体からの解放＝死ぬことの練習
5. 哲学と神話との関係
6. 死後の裁きとあの世  
輪廻転生・天空の真下にある真の大地・地下世界  
哲学、市民の公共の徳 もっとも良い場所へ  
さまよう魂、タイタロスなどに落ちる魂

『ソクラテスの弁明』との関係

- ・「無知の知」→イデア論に立脚する「魂の不死」
- ・ 論理に基づいた生き方
- ・毒杯の意義 正しい生き方>死 イエスの磔に対応  
→超越的世界の開示

参考文献:

1. F. M. コーンフォード『ソクラテス以前以後』(岩波文庫)
2. 加藤信朗『ギリシア哲学史』(東京大学出版会)
3. 山本巍、今井和正、宮本久雄、藤本隆志、門脇俊介、野矢茂樹、高橋哲哉『哲学 原典資料集』(東京大学出版会、1993年)